

# アジア・太平洋地域における第一次世界大戦

江 藤 淳

\*本稿は、平成七年戦後五十年に際して様々な立場の方々を戦史部にお招きした一連の研究会において、十一月十五日故江藤淳氏によりなされた講演の抄録である。江藤氏は、御存じのように昨年の七月二十一日逝去されましたが、改めて哀悼の意を表します。講演は、従来あまり知られていない御自身の戦争体験も交えた興味深い部分もあり、この度御遺族・府川紀子様の御快諾をいただき、掲載いたしました。最後に本講演は議論が分かれるテーマにも言及しておりますが、江藤氏個人の見解であることを付記いたします。

(文責・庄司潤一郎)

現象でありますから、これには日本の立場というものが非常に分かれがたく関わってくるわけであります。

日本国は、政府としてこの戦争をかつて「太平洋戦争」と呼んだことはない。鈴木内閣が、これまで慣行であつた八月十五日を「戦没者を追悼し平和を祈念する日」と閣議決定をもつて決定したいと、有識者が諮問を受けた。その際、戦争をなんと呼ぶかということが議論になつた。日本開戦直後の東条内閣の閣議で、十二月十二日この戦争を「大東亜戦争」と呼称すると決定しました。このことを日本政府は、戦後五十年の今日にいたるまで一度も取り止めていない。このことは、内閣にもきちんと確認いたしました。これが歴史的事実であります。ところが、やはり政府は政府であります、少しこれは違う表現を考えようじゃないかといふことがあります。そこで内閣参事官のある方と諮問委員会で最も若輩でありました私が答申書の文案を練ることになり、それではいつそのこと文学的に「過ぐる大戦」としたらどうかということになりました。そんと具合が悪い。ことが戦争ということになりますと、これは国家間の

## 一 戦争の呼称をめぐつて

妙な、長つたらしい演題にしましたのは、防衛研究所ではいわゆる「太平洋戦争」の御研究をやつてらっしゃる。これは誠に結構なことではあります、『太平洋戦争』というのは問題のある呼称であります、歴史というのはある事象をなんと呼ぶかというところからきちんとやりませんと具合が悪い。ことが戦争ということになりますと、これは国家間の

れから政府の公式な、それこそ戦没者追悼式における總理大臣等の戦争に対する言及の仕方、つまり、「大東亜戦争」でもないけれども、「太平洋戦争」でもない。そこに非常に微妙なわが国政府の「過ぐる大戦」に対する姿勢が出ていた。

私はその程度の慎重さ、配慮は常にあつてしかるべきものであつて、「過ぐる大戦」に関する戦史の研究とかなんとかいうとちよつと具合が悪いような感じもいたしますが、もし御研究の成果をおまとめになつて世に問われるときに、「太平洋戦争」という言葉をそのままお使いになられる場合には、私はどうも承服しかねる。

その理由をこれから申し上げますが、「太平洋戦争」、英語で言えどPacific Warという言葉がいつ日本人の目に触れたかといいますと、はつきりと特定できます。それは、昭和二十年の十二月八日であります。降伏文書の調印が行われたのは同年九月一日ですが、このとき既にアメリカは、民間検閲支隊、Civil Censorship Detachment(CCD)という特殊部隊を日本占領の先陣の一つとして送り込んでおりまして、戦争中に練りあげておりました日本を占領した場合に直ちに実施すべき最もコンプリヘンシブな検閲を開始する準備をしておりました。実は九月中から日本の新聞、同盟通信社、今は共同通信と時事通信に分かれた国策通信社が二十四時間の業務停止を食らって、海外業務一切を停止させられたというところから始まりまして、新聞、雑誌、放送等のマスコミの検閲、それから郵便、電信、電話等の一般市民レベルでのコミュニケーションの検閲、最後には紙芝居の検閲にまでいたつたという誠にコンプリヘンシブな検閲が行わ

れまして、民間検閲支隊は昭和二十四年にアメリカの占領経費削減政策によつて一応廃止されましたけれども、これから申し上げます一つの占領軍の機関C I & EこれはCivil Information and Education Sectionつまり民間情報教育局に移管されまして、占領終結まで続いたのであります。

アメリカは実は第一次大戦から検閲ということを始めておりますが、あまりうまくいかなかつた。そこで第二次大戦になつた時には、その戦訓に学びまして、二つの役所を作りました。一つはU.S. Office of Censorship、合衆国検閲局。この長官に大統領が任命したのが、バイロン・プライスという人物で、彼はA P 通信社の専務取締役で編集局長だった人です。

もう一つは、U.S. Office of Informationというものを作りました。これは要するに合衆国情報局といふものでありまして、政府の宣伝機能です。第二次大戦の時アメリカはいろんなことがうまくいきましたけれども、この検閲政策及び宣伝政策においても水際立った成績を挙げました。

そして対独戦が終わつた途端に合衆国検閲局といふのは解散の準備を始め、この要員を大部分をドイツの占領地域に送りまして、ドイツ占領にともなう検閲業務といふのに振り向けました。今度は同じようなことを日本を占領したあとでもやろうとしておりまして、太平洋陸軍総司令部に民間検閲支隊というのを設けなければいけないというのは、ガダルカナル撤退の頃から大統領府周辺で議論が起つております。そこで日本を占領して一方で検閲を始めました。他方で丁度合衆国情報局にあたる仕事を始めたのが、民間情報教育局であります。日本の教育行政を変えたり、教科書に墨を塗つたりするのを命じた。

さらになんと昭和二十年十一月八日、アメリカ占領当局というのは、いやみといえばいやみなことを、ちゃんと日本人が忘れない日に何か日本に対してやるつてことを繰り返した。戦犯処刑の日が、今の今上陛下のお誕生日である十二月二十三日であります。十二月八日という真珠湾攻撃の日に、新聞用紙の特配をして、見開き一ページで「太平洋戦争史」というものの連載を命じたのであります。「太平洋戦争史」とい

うのはもちろん、戦史部に相当するようなマッカーサー司令部の部局が編纂し執筆したものでありまして、満州事変から説き起こして日本の敗戦にいたるというわけで、これが今日流布していて、大部分の方々が大体中等教育位までの時期に歴史をお習いになつたとすれば、歴史記述の根底になつてゐる。これが大体東京裁判の時のキーナン首席検事の論告の骨法をなしている史観といいますか、歴史記述。これは昭和二十年十一月八日に初めて日本語で日本人に強制的に与えられた新聞記事に発している。ここで初めて、「太平洋戦争」という耳慣れない言葉が出ました。当時、東条大将以下のA級戦犯の訴追が行われていた。A級戦犯というのは、こういう悪いことをした人たちだから、裁くんであるというのがアメリカを中心とする連合国の大論議でありますから、悪いということを印象づけなければならないわけです。その第一段として、日本人にたたき込むたま。

それともう一つ、昭和二十年の十一月九日からだったと思いますが、日本放送協会東京放送局発信の「真相はこうだ」というラジオ番組。私が当時中学一年でしたか、何曜日かに一時間ぐらい、ベートーベンの第

五番の始めが鳴りまして、「日本はこんなに悪かった」というのをやるわけです。これが数か月前までは、こんなはずではなかつたなあーと思つて聞いて、全然違うことを聞いていたけれども、どうしてこう違うんだろう。私はまだ物心つきはじめた中学の低学年生の身であります。本当に真相はこんなんだろうかなあーと思いました。その後さらに「真相箱」というのをやりました。

又、当時共同通信の渉外部長で、のちに東大のアメリカ史の教授中屋健氏が翻訳者と一緒に擬せられて、占領軍当局が作成しました「太平洋戦争史」を全国の学校に副読本として売つたわけです。当時歴史・地理・修身の教育は禁止されておりましたから、その間に読めと。つまり、新聞に載り、放送で宣伝されただけではなくて、教育の現場にもそのような歴史記述が既に昭和二十一年の段階で強制的に配布され、生徒の教育に使われていたという事実としてあるわけですから、この辺は御斟酌がなくてはなるまいと思います。

その背景には、民間情報教育局の出しました「ウォーリルト・インフォーメーション・プログラム」のプロモーションについてという文書がございます。このプログラムといふのは何か。日本人は悪い奴で、戦争を起したことは罪であるということをひとり残らず日本人にたたき込むプログラム。それはこうすべきだということを言つてゐるわけですね。

一番向こうの恐いのは、A級戦犯が断罪される間にいろいろ法廷のやりとりが公開されると、日本にもいろいろ理屈があるぞということが、新聞がいくら検閲されてましても、ストレート・ニュースのごく中心のと

ころは、言葉遣いは別として出るわけですね。そうすると、口コミというのもありますし、当然東京裁判なるものの公正さ、あるいは「真相はこうだ」の真相は本当かといった疑惑・懷疑に取りつかれている。それを払拭しなければいけないから、これでもかこれでもかとやるんだというのが、この文書<sup>(1)</sup>。

つまり「太平洋戦争」という言葉は、そういう背景のなかから浮かび上がってきた言葉でございますから、軽々に「太平洋戦争」なんて言葉を使うべきではない、民間のジャーナリズムが使うのは勝手であるが、国家機関がなさる事業で、一旦日本政府が正式の呼称を決め、それをリユース（譴責する）してないという事実がある以上は、軽々に「太平洋戦争」の研究という風に銘打たれては非常に困る。それは大変御苦心なさらなければいけないでしょうし、「過ぐる大戦」の研究なんていうのも、何だか文学的過ぎるから、どういう風に言つたらよいか。ですから今日は「アジア・太平洋地域における第二次世界大戦」という何だか舌がもつれるようなことを申し上げたのは、そういう意味なんです。つまり戦争の呼称自体が問題である。そうかといって、太平洋戦争といえば、アメリカの占領宣伝計画に迎合しつばなしということになる。大東亜戦争というと何ら反省がないように思われるのは心外である。ただ反省といふ意味は、敗けた国がなぜ敗けたかというのを反省するのは結構である。戦争というのは戦争ですから、人が死に、いろいろ辛いことが起こるのは当たり前なんですね。戦争というのは、オウム真理教で落田さんを殺させられた容疑者が、もし落田さんを殺さなければ自分が殺される

ことが自明であつたと。したがつて緊急非難として殺人行為をした。戦争というものが始まることには、刑法上の緊急非難に非常に似た状況がある。必ず動があつて反動がある。

その頃一方でそういうことが行われている間に、当時外交機能を超法規的に剥脱されていた外務省は、何もすることがないから勉強しておつた。それで一体講和条約はいつ結ばれ、どんな条件であろうか。日本の防衛はどうすべきか。アジア安保・集団安保を考える必要があるのか。国連というものとどう絡んだらしいのか。あらゆる問題を考えている時にですね、そういう一方的な決め付け的な史観で書かれた歴史記述が出てきたことは放置できない大問題である。そこで外務省は、嘱託として勤務していた、ワシントンの大使館にも永らく専門職として在勤したジャーナリストの富桙周太郎氏に、「太平洋戦争史」を論駁するような研究を命じたわけです。それが、「『太平洋戦争』史論」<sup>(2)</sup>という、非常に緻密なもので、歴史的事象には、動があつてそれについての反動があると。かかる日本が断罪されている事件というものは、その前提としてイギリスあるいはアメリカ、ソ連等々のこういう動きがなければ日本はこういう対応をしなかつたはずである。その対応の部分だけを捉えて、悪いと言つている。しかし、そのような史観が占領直後に現われたのはアメリカの日本占領の目的を考えれば無理もないかも知れない。したがつて将来平和克服の暁には、両国の学者・有識者が集まって、共同の歴史編纂委員会なるものを設置し、そこにおいて最も公正にして妥当なる客観的歴史記述を一日も早く完成すべきであるというのが、最後の提言で

ある。これが、富樹さんの学者として、外務省の嘱託として、長年勤務された職務柄の良心として、誠に妥当な御意見で、私はこれに全く賛成なのですが、さあこういう委員会が、十年たつても三十年たつても出来るかどうか。大体戦争の歴史というものは、国際的なヒストリオグラフィーが出来る性質のものなのかどうかということに立ち返って考へると、これは必ずしも楽観的に考えられない。そう言つておけば、なんだか気持ちがいいんですけども、なかなかそうならないだらうと実は私は思つております。

## 二 私の戦争体験

私はもちろん現在六十二歳でございまして、兵籍にあつたわけではございません。終戦直後に、旧制中学の生徒になつたという年頃の人間でございますから、子供として戦争を見ていた。私は元来東京生まれの東京育ちでございますけれども、体の非常に弱い子供で、肺門リンパ腺を腫らすという、幼児結核のようなものを患つておりまして、困ったことに長男として、昔は幼児の死亡率が高く、父親がすぐ死んでしまうのもかわいそだと思ったのか、鎌倉に転地をさせられましたが、日米開戦の直前、昭和十六年の秋でございます。

私の家は、海軍の軍人の多い家で、曾祖父は古賀喜三郎といつて、明治草創の海軍に付け出し海軍中尉になつて、少佐でやめまして海軍予備校（現在の海城学園）という学校を作つた人間。私の祖父と申しますのも、私は本名を江頭と申しますが、江頭安太郎と申しましてやはり佐賀出身の兵学校十二期明治十九年の卒業でございまして、日露戦争の時は大本営海軍参謀で、亡くなつたのが大正二年の一月二十三日、その時は海軍省軍務局長をしておりました。そういうわけで、私の父は銀行員で、おじも銀行員で、みんなシビリアンなんですが、例えばおば達の家はみ

祖父の隣の家が、予備の海軍大佐のお宅で、その方が召集で開戦前に仮想巡洋艦の艦長になつてゐるという話を家族から聞いていた。その大佐の奥さんが「魚」にたまたま來ていた。戦争が始まつた日だつて、やっぱり夕食は整えなきやならないし、食べなきやならない。そういうことが、今の若い人はわかつてない。戦争が始まるとみんな乾パンを食べてゐると思つてゐるようなところがある。戦争にはいろいろ楽しいものがあるということ、これが一番わかつてないですね。勝つた時の楽しさ、シンガポール陥落の時の旗行列とか、非常に楽しいものがありました。そういうこと言つてはいけないらしいんですが、それは言論の弾圧だと思つておりますから、私は今後とも上手に言おうと思つております。その時家の者と隣の奥さんが挨拶をして、大変なことになりましたねつてなことを言つてゐる。私は遠慮のない質で、この戦争敗けたらどうするのと言つた。これはちょっと変な子供だ、体が弱くてまだ学校を休んで、そんなガキがそんなことなぜ言うか。

鎌倉に転校いたしまして、鎌倉の学校に正式に通い始めたのが昭和十七年の四月からであります。昭和十六年十一月八日は、稻村ガ崎にございました母方の祖父の隠居所に預けられておりました。「魚」という魚屋さんがあつて、夕方家の者が買物に行くのにくつついてその日も行つた。

んな海軍の将官の家であつて、何か縁組をしますと、海軍というのはインブリードする軍隊でありまして、海軍にどっぷり浸かって生まれて育つて、しかもこの虚弱兒である。これは非常に負担の重い立場でございまして、丁度軍縮の頃ということもありましたし、眼が悪かつたこともあり、父が銀行員になつちやつて、軍人の子はあまり軍人が好きでないのかもしれません、軍人の孫となりますと又別ございまして、私は小学校低学年でもなんとか兵学校の受験年令になるまでに体を鍛えて兵学校に入りたい。今だに生涯の最痛恨事は、戦争に敗けて兵学校がなくなつたことで、もし兵学校にめでたく入学して今頃になつていたら何になつていたかなということを頻りに考える。

そんなわけですから、実は戦争というものはあまりロマンティックに考えないのか、ある意味では普通の子供としてはやや近いところから見たのか。つまり戦争というのは勝つこともあれば、敗けることもある。大体、連合艦隊は非常に強いと言われているけれども、いろいろ調べてみると五・五・三である。ということは小学生でも知つていて。大和・武藏があることは知りませんから、長門・陸奥で、向こうは戦艦の数を比べて、先ず海軍というのは数と大砲の数とそれから速力ですから、敗けるに決まっているのにどうしてこんなことやつたんだ。最初に勝つたといつて、軍艦マーチが鳴つているから嬉しいんですけども、勝つてもすぐ敗けるんじやないか。敗ける時どうするんだろうと。このもし敗けたらどうなるんだろうという気持ちは、実は戦争中時々楽しいことがあつてやつぱり日本は強いんだと思いますけれども、ほとんど何か動物

みたいなもんで、重苦しいものが頭の上に鍋をのせられたような感じがずう一つとして来るんですね。

それが不思議なもんで、これは誰か書かなきやいけないですけれど、日本の国力が最大になったのは昭和十七年のミッドウェー海戦前夜まで。この時日本人は誇りに満ち、使命感に満ち、光輝いていたと思います。これは建国以来、神武天皇以来初めてじゃないか。それは当時の音楽とか絵画、それから詩人の詩、戦後はあまり詠まれていませんけれど、伊東静雄とか、三好達治とかいうような優れた詩人の詩。そういうものをご覧になりますと、昭和十七年半ばまでの日本というのは、大変に高揚しております。ちょっと今まで左翼運動やつてている人までが、支那事変がいつまでも解決しないというのには何となくうつとおしい感じがしていられるけれど、ついに天の岩戸が開いたってなことを言つた人がいるぐらいで、日米開戦というのはついにやつたかという解放感と高揚感というのが非常に出ております。私もちろん子供ながらそれを共有しないわけじやないんですけども。その途端に実は悪い癖で、もし敗けたらどうするんだろうというのが出た。これは忘れません。その後戦争の推移がミッドウェー、ガダルカナルの撤退からさらに重くなつてくる。

それでも実はこれも多く見逃されておりますが、永井荷風の『断腸亭日乗』という大変ユニークな日記がございます。これで戦時中のことを見ますと、戦時中の日本経済がいかにブーミングであつたか、儲かつていたか。大変な通貨供給量でどんどん臨時軍事費が出てまいりますから、変な話ですけれど、十円札をこんなに持つて女を買いに行く、昼間つか

ら遊んでいると。それが出来た。それから戦時中というのは、非常に厳しいことばかり言いますけど、不良少年・少女にはもつてこいの男女

純交遊の時期なんですね。やはり戦争をしてますと、世の中の規律といふのは、軍隊とか、工場のなかというものでは厳しく一応整えられますけれど、同時に明日をも知れぬというの段々近付いてくると、何でもやつてやれというのが出てくる。それから不思議なもので若い男女といふのはオスとメスですから、種を保全しようとこれやはりセックスに関する関心が高まる。それから女子の喫煙・飲酒、職場への進出。今のキャリア・ウーマン、フェミニズム、ウーマンリブとかいったのは、実は戦争の所産です。これは日本だけではない。アメリカでもヨーロッパでも、戦争は非常に女権を拡張する。そういう要素もあって、経済の潤い方、淫靡なことまで含め、荷風が驚いているんです。最早敗色濃厚なるにもかかわらず、このあつけらかんとした庶民の明日をも知れぬ楽天性、誠に愚かと言うべきか、不思議なる状況なりと。

それでみんなの行儀が悪くなっていますが、戦争には、戦争がもたらした弛緩の要素といいますか、解放の要素といいますか、それは何も植民地を解放したとかでかいこと言わなくとも、国内で不思議な、道徳的にはいろいろ問題があるかもしれないけれどもなんか不思議なものが起こっているというようなことは、実は私は小学校の中学年から高学年になっていく、戦争中の一年一年、体もお陰さまで鎌倉に引っ越しまして、弱かつたのが段々丈夫になつてしまいまして、兵学校も夢じやないなど思い出した頃、そういう現象も目に触れまして、なんか戦争中の暗いイ

メージだけではなかつたような気がします。

しかし、アツツ島の玉碎など敗けるという予感は現実性を帯びてまいりまして、その頃になると、いつアメリカの日本上陸作戦が敢行されるかということが、家の話題になるようになりました。私の父親は三井銀行に勤めておりまして、情報は他の業種に比べると入つてくる。そうすると、もちろん子供の前で難しい話をするわけではありませんが、親類の寄合いや法事で、情報の交換しているのを傍で聞いてみると、これはますます悪いみたいだという話に段々なつてまいりまして、もう敗けたらどうすると聞くことが出来なくなりました。これは敗けるにきまつてるという感じがしてまいりました。

そろそろ本土空襲が始まりまして、私の東京の家は、富山ヶ原のほとりにございましたが、もちろん下町の空襲は免れたんですけど、昭和二十年五月の皇居が炎上した山の手の大空襲できれいさっぱり全部焼けました。ですから、疎開といつても、私が転地させられた脇に父が小さな家を借りまして、そこに家族みんなが来たんですが、とても東京の家にあるすべてを運ぶことは出来ないわけですから、納戸とか蔵とかそのままにして、完全に焼けてしまいました。何もなくなつてしまつた。それ自体、もっと苦労された方に比べれば、なんでもないことなのでござりますけれども、やはり小学校六年ぐらいの子供にとつてみると、そこに祖父以来のいろいろ思い出の品が詰まっている納戸とか蔵が、全部灰になつちやうというのは、歴史がその瞬間になくなるという非常な喪失感がございました。これは実は、今日にいたるまで少しも直つてない。

多くの物を失つて、ついにそれで終戦になりまして、世の中ががらつと変わりました。先程申し上げたような「太平洋戦争史」が出たり、「真相はこうだ」が出たりするような時に、中学生になつて、戦後の学制改革のなかで制度が変わつたりすることを、本当に私どもは翻弄された世代でございます。修身はもちろん、地理・歴史の授業もなくなつて社会科学というのが突然入つてくるというようなことでございました。それから、占領が始まつた時鎌倉第一国民学校というのを卒業しまして、藤沢にございます湘南中学校というのに入りまして、その三年の一学期で東京に本当のバラックの銀行の社宅が建つたものですから、鎌倉の仮住居から東京の場末にある社宅に移つてまいりました。

私が転校したたのは、東京の都立一中、今の日比谷高校です。本当に驚いたのは、学校の体育館の屋根が直撃弾を受けて漏斗みたいになつておりまして、体育館は使えない。その上に雨水が溜まつてゐる。教室のなかは、駆り集めてきたちゃんと座れないような椅子と机で、しかも壁は全部焼けた跡の壁で、塗り直してないところに黒板だけ吊つて授業をする。日本史を教えられない社会科の先生が、A級戦犯広田弘毅の弁護団の専門委員、つまり広田総理がいかにりっぱな人であつたかということを一生懸命集めて、市ヶ谷に運んでおられた先生でした。ですから、この先生の授業はないんです。月に一遍ぐらいちょっと来て、なかなか難しいなあー、諸君しようがないけど又行くからなあーと言つて、行つてしまふ。又、朝礼はやるんですが、兵学校から帰つてきた人が、兵学校の制服のままで、黒い風呂敷を持ちまして、号令をかけるんですね。そ

の人だけは、戦争終わつて三年経つても、まだ兵学校をやつてゐる。その他の生徒は、みんななんでこんなことやつてゐるのかわからない感じでして、非常な価値の相対主義と申しますか、価値観の空洞と申しますか、それが著しいのが終戦直後の状態でございました。

しかし、そういう風に極端な時代が交差した、そこを丁度交差するなかで物心ついたということは、悪いことばかりではなかつたような気がいたしまして、自分の個人的な喪失感、国民としての喪失感というものを埋めるものは、言葉しかないと。言葉といふのは、言葉によつて探り得るものを探り、それをささやかな努力を続けて定着し、多くの方々に御検討いただき、御批評いただいて、そういう風に私が埋めようとしてきた努力を受け継いでいたくなり、もつと実際的なことに御利用いただくなりただければ幸いである。そんな風に思いながらいつのまにか文学の世界に係わり、それを越えたような、もちろん言葉といふ点では、越えたといつても繋がつておるわけでござりますけれども、その拡大といいますか周辺と申しますか、そういう問題についてもいろいろ考えたり意見を発表したりして四十年たつてしまつたというのが、私の戦争体験であります。

### 三 戦後五十年雑感

戦後日本におけるいわゆる太平洋戦争観の問題点というのは、繰り返しになりますが、要するに昭和二十年十一月八日に新聞用紙の特配によつて、配布された「太平洋戦争史」をなるものを根底とする史観にす

べて順応しているという事実である。占領が終わってからも依然としてそれが続いているのはなぜかというのは、大枠で言えば戦後の日米関係というものが先ず考えられます。サンフランシスコ条約締結と同時に、その日の午後吉田全権はただ一人サンフランシスコの第六軍司令部に赴かれて、旧安保条約を締結された。それまで占領軍であった在日米軍の法的地位がその条約によつて変わりまして駐留軍になつた。昭和三十五年に岸内閣によつて改訂されて、今日にいたつては大枠がありますから、かつての敵国であり、そして普通非常に寛大という風に、寛大な面もあつたけれども、実は国民の歴史認識とか、精神とか、教育の根底とか考えると、苛酷極まりない占領政策をしたアメリカは、日本の友邦と位置付けざるを得ないものになつた。

そしてその狭間に、まだサンフランシスコ条約が締結される前に朝鮮戦争があつた。朝鮮戦争勃発直後昭和二十五年七月にこれもマッカーサー指令で、警察予備隊の創設と海上保安庁の増員というところから、

戦後といわゆる再軍備が始まり、今日の防衛庁、陸海空三自衛隊にまで発展してきたというような事情がある。そうすると戦後の日本の防衛力とは何かの言えど、これは非常に国際的な定義を先ず最初から行われている軍隊である。つまり国際関係のなかから生まれている軍隊と言つてはいけないんじようが、軍事組織といふか武力である。国際関係から生まれた武力であるというのはあまり例のない武力である。それを自衛隊と呼んでいるところが、またちょっと不思議でありまして、いろいろ言葉は意味論的混乱を生じつつ今日にいたつては、自覺していればい

いんですが、自覺しなくなると、大変なことになる。ですから、自衛隊といふか國軍といふか、日本の防衛問題の難しさ、自衛隊の難しさといふのは、朝鮮戦争勃発時に当時日本においてました二個師団程の兵力をマッカーサーは急速朝鮮半島にスイングせざるを得なくなつた。要するに日本は軍事的空白になり、これは差当つて日本人をもつて充当せざるを得ない。七万五千人の警察予備隊なるものを作れ、米式装備にして、米軍の教官がこれを急遽訓練をする。それから海上保安庁も八千人増員しろ。それで超法規的に掃海作業をやれというようなことから始まつてゐるわけで、これはやはり米軍の補完というようなことが原点にあるわけです。それだけじゃないんですけれども、それが大きな問題で、日米安保条約、そして自衛隊ということになりまして、今度の沖縄の非常に感情的な問題（九月四日に起つた、米兵二人による女子小学生暴行事件）についても、その辺の問題をずう一つと引きずつてゐる。

一方、日本が国際社会に参入した明治初期の日本の軍事体制といふのはどうであつたか。もちろんこれは国防ということを考えたわけでありまして、国際的な社会に入つた。国際軍隊を作るんじゃない。日本人が日本人のために日本を守るために何が必要であるかというのが、国防の原点であつた。諸藩の兵隊を御親兵にしてそれを鎮台に分けるというわけですね。鎮台は何かというと内を鎮めるわけですね、内乱の鎮圧であります。内乱によつて国が崩壊する危険というのが、先ず最初に国家の軍事力が担当しなければならないものである。これは警察だけでは出来ない。西南戦争、佐賀の乱、秋月の乱、萩の乱があり、旧幕臣が一斉

に蜂起したら、明治体制は一朝にして崩壊しますから、鎮台を置く。当時の兵隊は、将校はみんな旧士族でしたが、あとは百姓だったり、町人だったりする人達だけで、徴兵した人達。それで固めるというところから始まっている。これは非常に健全な思想ですね。

一方で国際的な使命を負っている自衛隊、早い話が地震であります。地震の時に、先ず対応していただいた。実際に献身的にやつていただいたことが、非常にリラクタントにしか認めなかつたマスコミも次第に応ずるようになつていったのは、これはもう自衛隊の支援、被災者に対する救護活動。つまり天変地異が起つて国が内側から弾けかえることがあります。関東大震災の時には陸軍は実に十個師団を関東平野に展開して、帝都の治安と被災者の保護に当たつた。海軍は定期便を堺の大浜から横須賀へ飛ばして、コミュニケーションを維持した。それと同じことを、いろいろ法令の不備があり、政府の対応の遅さがあり、自治体の非常に鈍感な対処があつたにもかかわらず、自衛隊はなさつた。これ、鎮台の役割。

それから、今度が何が起つたかというと、三月二十日になると地下鉄サリンという事件が起つた。これは破壊活動防止法が適用されないのが不思議である。もし刑法の枠内だけでやるんなら、最初に罪として挙げられている内乱罪が適用されても少しも不思議はない。ああいう事件が起つたら、これはやはり自衛隊の今まで持つておられる化学戦に対する予防措置、それについて鋭意今まで研究を重ねられてきたことに依存せざるを得ない。これ又鎮台の役割でありまして、そういうものは

やはり国家が保有する唯一の組織的な武力を有効に使わなければ、こういう奇々怪々な事件の再発は防げない。これは日米防衛協定とか、日米地位協定とかなんとかいう問題ではない。とかく自衛隊というと、目が海の向こうに行きがちになる。外務省との共同案件になるということが多いすぎる。ところが、自衛隊というのは、先ず日本人のために存在していくださるのでなければ困る。日本人が頼りになるという印象を、あらゆる機会を与えて我々に教えていただきかなればいけないです。その任務というのは、実に専い任務であるにもかかわらず、マスコミをはじめとする世間一般の認識の浅さを考えると誠に痛恨の極みと言わざるを得ません。今年なんかは不幸な事件が相次いで起つたから、多少国民の自覚が事実広まつていると思います。

そう思つたところで、今度戦後五十年。戦後五十年で記念するというのは戦勝国のやることで、敗けた方のやることではない。戦勝国ががんがん言つてきて、今度はアメリカは日本に表向き検閲組織を持つてゐるわけじゃございません。ところが、これはビリヤードのスリー・クツションじゃありませんけれども、韓国・中国経由でやります。昨日なんかは江沢民と金泳三が仲良くなんだか言つてくれまして。何も知らない学生とか一般国民は、やっぱり日本は悪いんだと。又「ウォー・ギルト・インフォーメーション・プログラム」の新版をマスコミがやつてくれてる。そういうものの存在も知らなければ、あつたぞといふら言つても忘れたくなる。不思議なこのなんというのでしょうか、駄鳥が具合が悪くなると、ついに追い詰められると砂漠を掘つて首を砂のなかに埋めちゃ

うんだそうですね。何も見ない、そのうちにばんとやられちゃうという駄鳥的サイコロジーというのが瀟灑しておりまして、困ったものだと思つております。

私は、人間の眞実というのが一番大事である思つております。つまり先程申しましたように、落田さん殺害ではありませんけれども、食うか食われるかと、立つて戦わなければ殺される。殺されるだけではなくて、歴史と文化が破壊され否定され、日本人のアイデンティティーが抹消されるという事態になれば、これはやはり戦わざるを得ないというわけで、戦つたからには敵と味方しかいなくなるわけです。戦争中基本的人権がどうしたこうしたなんてことでだから日本はなんていうのはとんでもない話で、それは比較研究をやってみればいいんで、アメリカは憲法修正一条であったかも無条件な保障をしているようでありながら、第一次大戦の時から戦時立法を行つて検閲行為を国家がやつている。第二次大戦ではさらに洗練して、非常に有効な、ついにイギリスをも抜くような巧妙な検閲と宣伝の車の両輪を作り上げ、それを占領地域日本に利用し、その手法を今度はスリー・クツションの手法で近隣諸国をやつて、日本コントロールを維持しようとしている。

こういう風なことを考えると、実は私は題はちょっとあまりどぎつくて、編集者がつけた題なんですが、今から七・八年前に『日米戦争は終わっていない』<sup>(3)</sup>という語り下ろしの本を芸春秋の子会社ネスコといふところから出したことがござります。しかしファイギュラティブ（比喻的）に言えば、日米戦争は終わっていない。日中戦争、日中間の葛藤は終わっていない。終わるわけがない。つまりネーションステートというものが、グローバルに存在し続ける限り、ネーションステート以外の人間のまとまり方というのは一つも出来ていない。あとは地域と称する国に準ずるものがある、香港であるとか、台湾であるとか。大体ネーションステートが百幾つ集まつて、国連の加盟国になつてゐるというような状態が、ボーダーレスと言おうと、インターネットがどうなつたと言おうと続いている以上は、必ず人と人との間のコンフリクトは続くのであります。日本のようにほとんど均一文化を持つた国民が一億二千万いて、その教育水準は高くその文化は古く意味のあるものであるという時にはですね、戦争がいいとか悪いとかいつても始まるものではない。平和とは戦争のない状態である。平和という戦争のない状態を守ることだけが価値では、決してない。平和の絶対視というのは、実におかしい。もし憲法がそういうことを規定しているなら代えなければいけないというのが私の意見です。

#### 註

(1) 占領軍による検閲について詳細は、江藤淳『閉ざされた言語空間』（芸春秋、一九八九年・一九九四年文春文庫）を参照。

(2) 江藤淳『忘れたことと忘れさせられたこと』（芸春秋、一九七九年・一九九六年文春文庫）所収。

(3) 『日米戦争は終わっていない』（ネスコ、一九八六年）。